

『千虫譜』諸写本の比較

磯野直秀

はじめに

- | | |
|-------------|------------|
| 1 栗本丹洲の著作 | 6 万香亭本系の写本 |
| 2 『千虫譜』の成立 | 7 白井本系の写本 |
| 3 調査した写本の概要 | 8 曲直瀬本 |
| 4 久志本本系の写本 | 9 その他の写本 |
| 5 雪齋本系の写本 | 10 まとめ |

はじめに

数多い江戸時代動物図譜のなかでも、栗本丹洲の『千虫譜』は武蔵石寿の『目八譜』や堀田正敦の『堀田禽譜』などと並んで、もっとも名高い彩色図譜の一つである。しかも写本が20点以上知られており、その一つ曲直瀬愛旧蔵本の影印本は近年出版されている⁽¹⁾。ところが、諸写本は転写の正確さと構成、内容がさまざまであるのに、曲直瀬本以外の詳細は報告されておらず、相互の比較も行なわれていない。博物学史資料としての基礎調査が手付かずなのである。

これまで丹洲の魚介譜を追跡してきた私⁽²⁾は、『千虫譜』も検討したいと思っていたが、その第一段階である諸写本の比較は、暇なときにボツボツ見ておくというわけにはいかない。時を置くと記憶が薄れて見落としが多くなるからで、どうしても短期決戦しかない。そこで1993年の夏をすべてそれに当て、北は仙台から南は大阪までを飛び回った。幸いにも事は計画どおりに運び、所在が判明した写本25点のうち24点に目を通すことができた。その結果、諸写本が数グループに分けられること、転写の正確さは予想以上に幅があること、不完全本が意外に多いこと等々が判明したので、本報でその大要を報告する⁽³⁾。なお、本書にはさまざまな題名が付けられているが、ここでは統一名として『千虫譜』を用いる。また、動物学史的検討は続報に譲る。

1 栗本丹洲の著作

栗本丹洲⁽⁴⁾は宝暦6年(1756)7月27日に、本草学者田村藍水元雄(1718—76)の次

男として、江戸の神田紺屋町で生まれた。名は新次郎、元東、元格、のち昌藏^{＊きよし}。丹洲は号である。本草学者田村西湖元長（1739—93）は実兄、同じく本草家で幕医として同僚でもあった渋江西園長伯（1760—？）は親戚に当たる（長伯の後妻が元長の養女）。

丹洲は安永7年（1778）に幕府医官栗本昌友瑞見（三代）の養子となり、天明5年（1785）幕府の奥医師見習として幕府医官に加えられ、寛政元年（1789）6月に奥医師に進み、同年12月法眼^{ほうがん}の位を与えられた。寛政4年（1792）には新設の二ノ丸御製薬所掛となり、翌5年末に養父の隠居により栗本家を継いで四代瑞見を名乗る。寛政6年（1794）以降は幕府医学館で本草の講義と薬品鑑定にあたり、また医学館薬品会^えの中心となって出品も重ねた。晩年の天保元年（1830）には法印に叙せられ、以後は瑞仙院と称した。天保5年（1834）3月25日、79歳の高齢で没したが、その直前まで現役の第一人者として活躍を続けていた。〔追記(1)参照〕

丹洲は数々の図譜や論説を残しているが、圧倒的に多いのは動物関係で、植物についての著作は少ない。そのうち刊本は没後に編集刊行された『皇和魚譜』（1838刊）ただ1点である。また、幕府医学館で本草を講じていたのに医学書は皆無で、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』などに相当する講述筆記も残っていない。

その栗本丹洲の著作をもっとも多く所蔵するのは国立国会図書館であり、表1に示した24点と『千虫譜』5点、併せて29点。まさに丹洲の宝庫の感があるが、単に点数が多いだけでなく、魚介類を中心とする自筆本を多蔵する点が本館の特色である。

表2には、国会図書館以外に残る丹洲の主要図譜類を示した。このうちもっとも注目されるのは、東京国立博物館蔵のいわゆる『博物館図譜』に残されている丹洲の自筆魚介図であろう。『博物館図譜』は、明治10年代に博物局の田中芳男らが江戸時代の図譜を切り抜き、同局の絵師が新たに描いた図を加えて編集したもの。これと国会図書館蔵の『魚譜』別10-38本を併せれば、栗本丹洲の自筆魚介図のほぼすべてが揃うと考えられる⁵⁾。一方、東博蔵の『栗氏図森』と『洋名入草木図』、杏雨書屋蔵『仙台草譜』^{ひん}の3点は、数少ない丹洲の植物画譜の自筆本として価値が高い。

これらの著作を内容別にみると、魚介類（亀や水生無脊椎動物を含む）を対象とする図譜が過半を占める。鳥類に関しては『百鳥図』がかつて存在したというが、その残欠など僅かなものが残るだけだし、獣類のまとまった著作はない。また、表1の『杜若考』『毒蛇法部図説』『丹洲翁七種雑考』『鷓鴣考』『加豆良』『鱒魚志』などは、いずれも特定の動植物についての小論である。この種の小論はほかにも幾つか知られている。

2 『千虫譜』の成立

丹洲が残した著作から判断すると、関心をもっとも深かったのは魚介類と考えられる。それに継ぐのは、著作としては『千虫譜』1点しかないが、やはり「虫類」であろう。もっとも、当時の「虫類」は現在の昆虫やクモ、ムカデはもとより、ミミズやヒルからカエル、トカゲ、ヘビ、コウモリまで含んでいた。『千虫譜』では、ウニやヒ

表1 国立国会図書館が所蔵する栗本丹洲の図譜と著作（『千虫譜』は表3に別掲；点数は図の点数）

請求番号	書名	冊数	点数	備考
別11-10-31	栗氏魚譜	10冊 写本	716	伊藤圭介旧蔵、10冊15巻；原図の多くは東博蔵『博物館魚譜』に残る
別10-38	魚譜	2軸 自筆	128	巻一タイ類、巻二アジ・サバなど；『博物館魚譜』との重複がない
別10-3	魚譜	1軸 自筆	48	サメ類；『博物館魚譜』にも自筆の同一図かなりあり
り二-3	魚譜	1帖 写本	178	『衆鱗図』に由来する図が大半；原図は別10-38本と『博物館魚譜』に残る
ち二-15	王余魚図彙	1軸 自筆	31	カレイ・ヒラメ；『博物館魚譜』にも自筆の同一図かなりあり
別10-20	海月・蛸・鳥賊類図巻	1軸 自筆	24	大半が『衆鱗図』由来の図；『博物館魚譜』にも自筆の同一図が多数残る
特7-232	翻車考	1冊 自筆	9	マンボウ
特1-966	翻車考	1冊 写本	9	マンボウ、上記自筆本の写
別11-30	異魚図纂・勢海百鱗	1冊 写本	67+51	奥倉魚仙筆；『異魚図纂』は丹洲魚譜の抄写、『勢海百鱗』は別人の著作
亥二-21	異魚図賛	1冊 写本	15	リュウグウノツカイなどの異魚；丹洲以外の図もいくつか含む
123-30	蟹譜	1冊 写本	83	約50点は『衆鱗図』由来；原図は『博物館虫譜』に残る
わ485-1	蟹譜	2冊 写本	83	123-30本の再模らしい
特1-3310	皇和魚譜	1冊 刊本	94	没後の天保9年刊；ほかに、212-332本と200-90本がある
別10-50	百鳥譜残欠	1軸 自筆	21	
特7-255	栗氏禽譜	1冊 写本	21	
特7-42	信天縁海鷲図説附漫画	1軸 写本	3	
別7-569	「栗本丹洲」鳥獣魚写生図	5軸 自筆	6	
307-153	仙台草譜	1冊 写本	100	杏雨書屋蔵自筆本を昭和10写
特1-3375	「丹洲先生」物印満写真略	1冊 写本	77	ワインマン植物図譜の抄写；表2の『洋名入草木図』の部分写
亥-215	蝦夷草木図	1帖 自筆	58	幕臣小林源之助の写生図を丹洲が写し、注記を付す
特1-3279	写生物類品図	1軸 自筆	30	植物を含む雑多な品；『写生物類品図』（別10-43）はまったく別の図譜
830-67	杜若考	1冊 写本	4	母子草考、毒蛇法部図説、翡翠二考を合綴
101-59	丹洲翁七種雑考	1冊 自筆	4	鶴鶴考、加豆良などを合綴
別13-12	鯉魚志	1軸 自筆		図なし

（注）『衆鱗図』は高松侯松平頼恭が編集した魚介図譜。→注2、磯野（1994）

表2 国立国会図書館以外が所蔵する栗本丹洲の主要図譜 (実見したものに限った；『千虫譜』は表3に別掲)

所蔵先	書名	冊数	筆種	点数	備考
東博	博物館魚譜	16冊	自筆	571	編集図譜で、他の人の図と混在；図数は丹洲のみ（以下2点も同）
東博	博物館虫譜	2冊	自筆	213	カニ85、エビ77、カメ21、ヘビ28など
東博	博物館介譜柔軟類多肢類	1冊	自筆	88	イカ・タコ・クラゲほか
東博	鯨図	1軸	自筆	17	熊野浦鯨図の写が主体
東博	栗氏図森	2帖	自筆	147	植物図譜、自筆109+他筆38
東博	洋名入草木図	2帖	自筆	111	ワインマン植物図譜の抄写と注釈が主体
国立史料館	栗氏魚譜	12冊	写本	633	祭魚洞文庫旧蔵；伊藤文庫『栗氏魚譜』（別11-10-31）と内容が一部同じ
東洋文庫	諸蟹譜	1軸	写本	80	衆芳軒旧蔵；国会本『蟹譜』と同一、原図は『博物館虫譜』に残る
大東急文庫	蟹譜七十五品図	1軸	写本	68	東洋文庫本の写しらしい
杏雨書屋	蟹譜	2冊	写本	82	国会図書館蔵『蟹譜』123-30本の写
杏雨書屋	仙台草譜	1冊	自筆	100	栗本文庫印あり
杏雨書屋	鳥巢獸類魚品石貝之写生	1軸	自筆	39	
杏雨書屋	栗氏図森	2軸	写本	147	東博上掲本の写
杏雨書屋	栗本瑞見写生図譜	5軸		251	鳥獸魚介植物；代々の瑞見の図が混在、丹洲自筆は68
杏雨書屋	丹洲魚譜	1帖		76	自筆と他筆が混在
岩瀬文庫	栗本丹洲魚貝譜	6冊	写本	463	上野年表の「文政2年11月「成」」は誤り
宮城県図	魚虫譜	7巻	写本	212	魚類のほかに爬虫類が多く、昆虫は含まない

(注) 国立科学博物館に『龍絵巻物』1巻（自筆）が残るが、修理中で実見していない。写真資料によると、両生類・爬虫類・象歯化石などがかなり多数含まれる。

トデ、クラゲ、カイメン、はては河童まで登場する。

丹洲が『千虫譜』の自序を記したのは文化8年(1811)、56歳のときである。その序文には、「寛政6年(1794)に医学館で本草の講義と薬品の鑑定を始めて以来、鳥獸草木を数多く知るようになった。また、世間にもそれらに関する書物は少なくない。ところが、虫類に関する書物が皆無に等しいのは残念である。そこで虫譜の作成を志し、虫を得るたびに図を描き、説を付してきたが、その図説が積り積って千を数えるまでに達し(至千数)、画帳も2帖になった。そこで自他の序を付して虫譜を作った」旨の経緯が記されている。もっとも「至千数」は言葉の綾で、のちに述べるように実数は1000に及ばない。

こうして本邦最初の虫譜が世に出たが、それからも図譜には新たな図が加えられ、3年後の文化11年の年記がある渋江長伯の序文には「五帖」になったとある。実際に、現存の『千虫譜』には文政年間に描いた図も少なからずあり、もっとも遅いのは天保4年(1833)7月1日の日付である。したがって、丹洲が天保5年に没する寸前まで増補が続けられたとわかる⁽⁶⁾。

『千虫譜』の原本は2組存在したらしい。明治15年(1882)に開かれた伊藤圭介錦窠翁の臺筵会(80歳の祝)に『千虫譜』の原本1組と写本2組が展示され、その原本(2帖)について、曲直瀬愛が「栗本丹洲先生千虫譜ノ原稿ニシテ、先生自ラ丹青ヲ描テ所説ヲ記スル者ナリ。先生ノ勉強、可想。余曾テ栗本鋤雲[六代瑞見]ニ聞クニ、此書順序ヲ整頓シ品数ヲ増補シテ已ニ稿ヲ脱セシモノアリシガ、偶池魚ノ災ニ罹レリト。豈、遺憾ノ至リナラズヤ」と『錦窠翁臺筵誌』に解説しているからである⁽⁷⁾。「順序ヲ整頓シ」とは蜂や蝶など同一のグループをまとめたという意味と解される。以下、このとき展示された原本を「原本A」、それ以前に池魚ノ災、すなわち火事で失われたという増補原本を「原本B」と呼び分ける。ただし、いつ焼失したかはわからない。

この臺筵会に展示された原本Aを、明治末年に当時の昆虫学の第一人者三宅恒方が栗本家で実見し、『昆虫世界』に自筆本に関する唯一の証言を残した。また、三宅著『昆虫学汎論』に、その原本の姿を伝えるただ1枚の写真(図1)があり、筆跡から自筆本であることに間違いない⁽⁸⁾。

『昆虫世界』の文によると、三宅は『千虫譜』の写本数点を見て、いずれも個々の図の多くが形態や斑紋、色彩の点で不正確きわまりないのにあきれ、原本もずさんなものに違いないと思いこんでいた。ところがある日、栗本家に残る原本Aを閲覧する機会を得て、その推定がまったく誤っており、原本の描写はじつに正確であることを知った。実例を三宅はいくつも挙げているが、その貴重な証言の一部を以下に採録しておく――

「……花蛾と称する蝶は、写本にては何者なるや不明なるも、原本にては明かにハナセセリにて……写本の閏四月九日写とあるものはベニスズメと想像さるゝも、原本にてはフタスジヒトリなること疑ふべからず。……ガマヘビの虫と称するものは、写本にては不明なるも、原本にてはスカシバの一種なること明瞭なり。又写本にては蜘蛛の網にかゝり居る蝶は何なりや全然不判明なるも、原本は明にモンシロテウ

を描きたり。……殊に驚きたるは、写本の幼虫の腹脚は其位置極めて不定にして正確なるもの極めて少きに反し、原本は不正確なるもの甚だ少きを見るべし。原本の図は可なり能く描かれ、オホムラサキ（原本ヨロイテウ）の如きは真に迫れる感あり。……千虫譜の原本は今日より見るも描かれたる各昆虫が、殆大概其如何なる種類なるやを判定し得べく、昆虫学参考となすべきこと少なからず」

しかし、三宅が見たこの原本 A も、大正12年（1923）の関東大震災で失われたといわれる⁽⁹⁾。

3 調査した写本の概要

今回の調査では、所在を確認した25点（表3）のうち図書館・博物館が所蔵する24点（うち3点は従来知られていなかったもの）すべてを実見し、残る荒俣氏所蔵の1点は『世界大博物図鑑 虫類』⁽¹⁰⁾に収められた多数の写真から大要を推定した。ここではその構成・形式の概要について述べる。

- (1) 上記25点はすべて転写本で、自筆本は無い⁽¹¹⁾。
- (2) 題名は『千虫譜』がもっとも多く9点で、『栗氏虫譜』5点、『丹洲虫譜』3点、『栗氏千虫譜』2点など。(10ページへ)

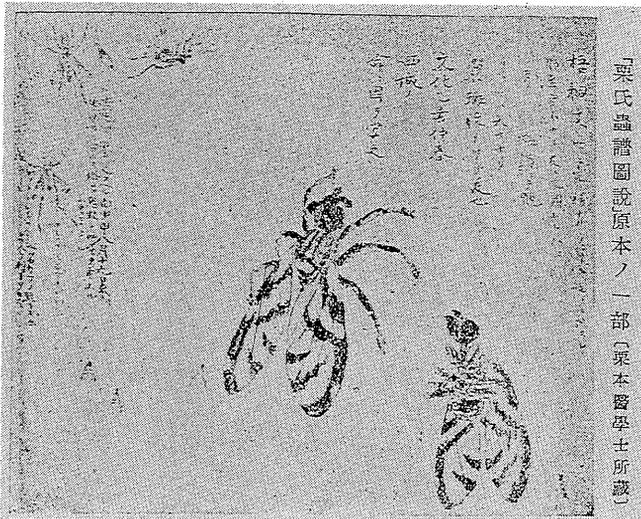


図1 『千虫譜』原本の写真

三宅恒方『昆虫学汎論』（1919）の古い写真からの複写なので見にくいだが、右は「梧桐皮上にある蠅」（ミツマタハマダラミバエ）を顕微鏡で見た図、左上は「鬼蚊」（ベッコウガンボ）、その下にミバエの実物大の図がうつつらと見える。筆跡は明らかに丹洲の自筆。右端は三宅による写真の説明。その本文に原本は2冊とある。

表3 所在が明確な『千虫譜』写本

No.	所在	題名	冊数	画質	点数	旧蔵者	系統	注記
1	国会伊藤	千虫譜	3冊	++	645	久志本常珍→伊藤圭介	久志本本	特7-159 (昭和19年購入)、用紙「緑漪軒」、服部雪斎写
2	国会	栗氏虫譜	3冊	+	645		久志本本	寅-11 (明治24年購入)
3	国会白井	栗氏虫譜	2冊		620	白井光太郎	白井本	特1-412 (昭和16年購入)、明治24松田直人寒翠写
4	国会伊藤	千虫譜	5冊		488	伊藤篤太郎	白井本	特7-160 (昭和19年購入)、もとは6冊か
5	国会	栗氏千虫譜	10冊		657	曲直瀬愛	曲直瀬本	別6421 (大正3年購入)、分類の配列は本書のみ
6	東博帝室	丹洲虫譜	3冊		546		雪斎本	博物館で明治8にNo.13を写したものの
7	東博徳川	栗氏虫譜	6冊		199		—	冊6現在不明;『千虫譜』以外からの写図計41点を含む
8	東博徳川	千虫譜	3巻		290		万香亭本	巻1は『和漢三才図会』「虫部」の写;点数は巻2+3
9	内閣文庫	千虫譜	3冊		539		雪斎本	No.6の写か(配列は異なる);序などは他から補充
10	内閣文庫	昆虫魚介図*	1帖	+	243		—	すべて『千虫譜』からで、良い図
11	東洋岩崎	虫豸図譜	5冊		254	前田利保	万香亭本	「万香文庫」印;巻1、3~6で、巻2は欠
12	東洋岩崎	虫譜精図*	1冊		113		—	3点を除き、『千虫譜』の写;明治写
13	東大田中	丹洲虫譜	2冊	+	547	服部雪斎→田中芳男	雪斎本	服部雪斎写;No.6の底本、明治9田中に譲渡;一部は無彩色
14	東大青州	丹洲虫譜	1冊		—	渡辺家	雪斎本	明治16写;No.13の注記のみの写で図なし
15	東大農図	千虫譜	1冊		575	佐々木忠次郎	白井本	もと2冊、旧題は『栗氏虫譜』
16	東大農図	千虫譜	7冊		605		白井本	明治写
17	東北狩野	千虫譜	4冊		450		久志本本	No.1の明治9年写だが、上巻相当部を欠く;点数は概数
18	岩瀬文庫	栗氏千虫譜	3冊	++	645	山本錫男	久志本本	No.1を久志本常珍より借りて文久2に写
19	岩瀬文庫	栗本氏虫譜	1冊		—		—	注記主体の抄録、図は雑な墨絵の略図;No.24の写本か
20	岩瀬文庫	虫譜*	2冊		306		—	注記をほとんど欠く;うち13点は『千虫譜』由来ではない
21	杏雨書屋	千虫譜	5冊		626	奈良阪源一郎	白井本	用紙「晩翠軒」
22	杏雨書屋	栗氏虫譜	6冊		645		久志本本	No.2の昭和10写だが、図は不正確
23	杏雨書屋	虫類図譜	2冊		183		万香亭本	「岸藩文庫」印(岸和田藩)、何冊か欠けているらしい
24	無窮神習	栗氏虫譜	1冊		—	井上頼圀	—	注記主体の抄録;図は墨絵の略図で、それも欠くものが多い
25	荒俣氏蔵	千虫譜	4冊	++			久志本本	未見だが、公表されている写真によって検討

(注1) 同じ場所に同一品が複数、あるいは雌雄・親子・背腹などが描かれている場合は、併せて1点とした。ただし、判断に迷うことも少なくないので、点数はおおよその目安にすぎない。なお、同一図が重複しているときと、注記のみで図を欠くときは計数から除外した。

(注2) *を付したのは『千虫譜』の写本と新たに判明したもの。

(注3) 画質は正確さを意味し、蝶の斑紋の描き方などから判定した。

(注4) 国立国会図書館所蔵品については、請求番号と購入年を挙げた。

(注5) 上野益三博士が昭和18年に杏雨書屋で実見し、報文で引用している宍戸昌旧蔵『千虫譜』3冊は、現在同書屋に存在しない。

(注6) 岩瀬文庫蔵『海産生物譜』(武蔵石寿旧蔵本の写本)は、全110点の水生動物図のうち49点が『千虫譜』に由来する。

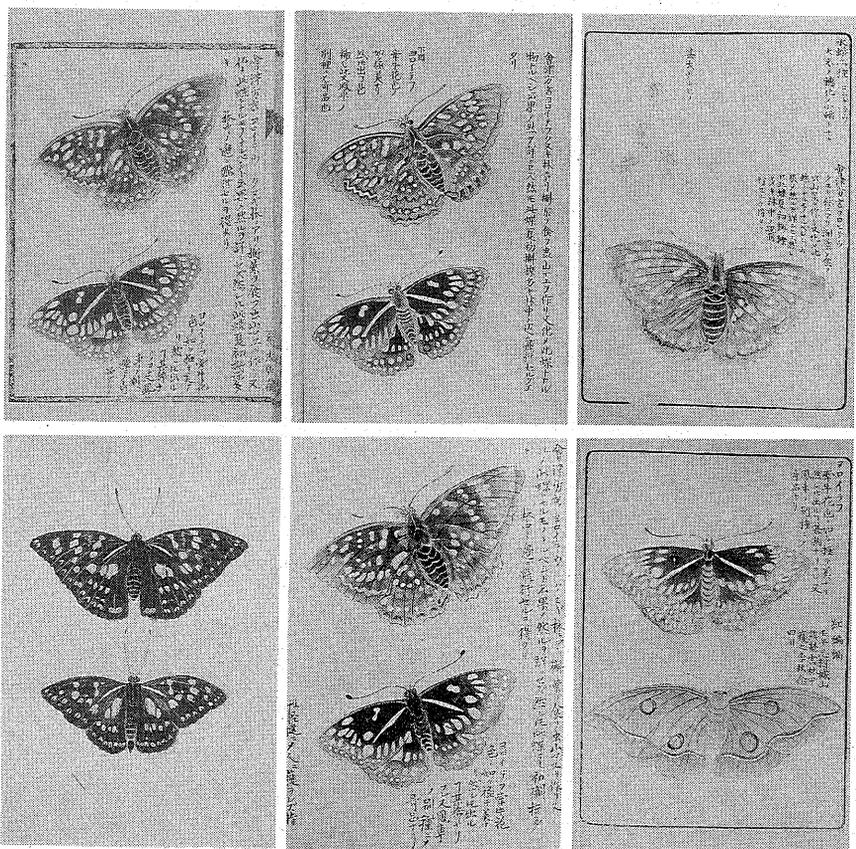
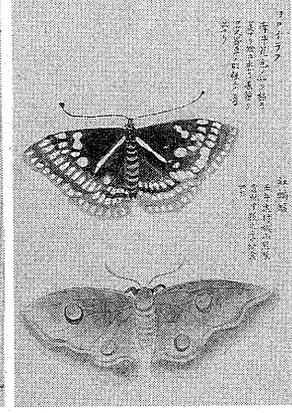
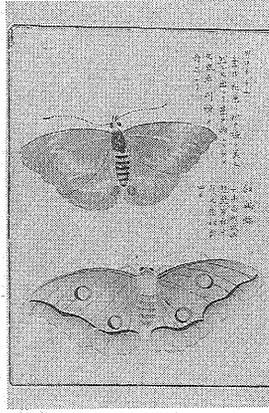
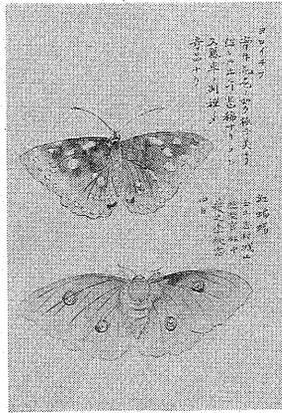
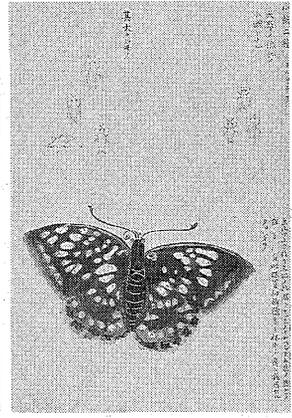
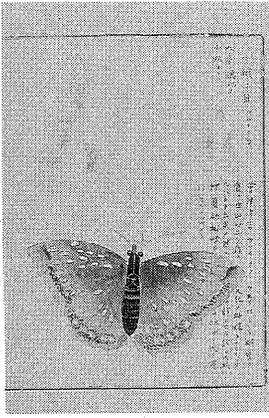


図2 オオムラサキ(ヨロイトウ)の図

①国会本『千虫譜』(No. 1, 久志本本), ②松森胤保著『兩羽飛虫図譜』(光丘文庫藏, 蝶名なし), ③国会本『栗氏虫譜』(No. 2, 久志本本系), ④東博徳川本『栗氏虫譜』(No. 7), ⑤⑥東博帝室本『丹洲虫譜』(No. 6, 雪齋本系), ⑦⑧国会本『栗氏虫譜』(No. 3, 白井本), ⑨⑩国会本『千虫譜』(No. 4, 白井本系), ⑪⑫国会本『栗氏千虫譜』(No. 5, 曲直瀬本)。①②③④ヨロイトウ雌(上)と同雄(下); ⑤⑦⑨⑪, 小蛾二種(上)とヨロイトウ雌(下); ⑥⑧⑩⑫, ヨロイトウ雄(上)と紅蝙蝠(下)。雪齋本系・白井本系・曲直瀬本では図の配置が同一であること, 写本によって蝶の斑紋がかなり異なることがわかる(色調も違う)。松森胤保の自筆画(1881)は実物にもっとも近い例として示した。それに比して『千虫譜』の図はいずれも実物そっくりとは言いかねるが, 比較的良好い図は①の久志本本。なお, 万香亭系本にはヨロイトウを含む蝶蛾の部分に欠けている。



①	③	⑤
②	④	⑥

(左ページ)

⑦	⑨	⑪
⑧	⑩	⑫

(右ページ)

(6 ページより)

- (3) 構成と所収点数は写本によって大差があり、図2から明らかなように図の写し方も雲泥の差がある。
- (4) 多くの写本では、最初に7件の序文①～⑦が置かれ、最後に跋文1件⑧を付し、別に寄稿文2件⑨⑩を載せる。その題・署名・年記は次のとおりだが、序の順序は写本により多少の異同がある。[] は氏名と当時の役職^ウ。
- ① 「栗氏虫譜小引」, 栗本瑞見源昌臧, 文化8年(1811)6月 [奥御医師]
 - ② 「千虫帖叙」, 東岳成島司直, 文化9年(1812)7月 [成島勝雄, 奥務大御番格]
 - ③ (序文), 越前守藤原清翰, 文化8年秋 [中野監物清翰, 先手御弓頭]
 - ④ (序文), 西園洪江虬, 文化11年(1814)8月 [洪江長伯, 奥御医師]
 - ⑤ (序文), 肥前守藤原義行, 文化11年8月 [佐野義行, 西丸御側衆]
 - ⑥ 「再題自画虫譜」, 栗本瑞見昌臧, 文化8年冬
 - ⑦ (序文), 源弘賢, 文政2年(1819)閏4月 [屋代太郎, 奥右筆所詰]
 - ⑧ (跋文), 竿斎石文和宗哲, 文化8年8月 [石坂宗哲, 奥御医師, 御鍼科]
 - ⑨ 松鈴虫考, 源弘賢, 文化8年9月 [前出]
 - ⑩ 松虫鈴虫の名の弁, 成島勝雄 [前出]
- (5) 本文冒頭に、蜜蜂・蚕・五倍子・虫白蠟の有用昆虫4品の記載が置かれている本が多い。この部分は文が主・図が従であって、それ以外では概して図が主・文が従であるのと対照的である。
- (6) No. 13の一部とNo. 19, No. 24を除いて、図はいずれも彩色されており、その大半には虫名が和名または漢名で記されている。注記は異名・方言, 形状・生態, その個体の由来などの記載だが、多くは短文である。また、採取・描画年月日を明記した例は全体の1割に満たない。名称だけで注記を欠く場合も多い。注記と別に「嘗々青蠅」「五月鳴蜩」など、詩経からの引用が所々に記されているのが目につく。
- (7) No. 5の『栗氏千虫譜』以外では整然とした分類の配列が見られない。たとえば、有用昆虫に続いて、No. 1はセミ2点・イモムシ類4点・ハチ7点・甲虫2点・海産動物(ヒトデ・ウニ・クラゲなど)13点……の順、No. 6はイモムシ4点・ハチ14点・ゴキブリ3点・冬虫夏草1点……の順である。同じグループの仲間が何点か連続して描かれている傾向はあっても、ハチならハチを1個所に集める作業は行なわれていないのである。
- 前述の(3)で指摘したように写本によって相当の違いがあり、一見千差万別に思えるくらいである。しかし、諸本を見比べるうちに、図の順序と配置を手掛かりとして比較すると数系統に分かれることがわかってきた。ここで「図の順序」とは、図がどのような順番で配列されているかを指す。また、「図の配置」とは、ある面(=頁=半丁)内に複数の品が描かれているとき、その上下左右の並べ方を意味する。そして図の順序の比較から、抄写本を除き、5つのグループに大別されることが判明した。それぞれの代表的写本の由来から、それを「久志本本系・雪斎本系・万香亭本系・白井本系・曲直瀬本」と呼び、以下の節で各々の詳細を述べる。

4 久志本本系の写本

下記6点で、序の順は①②③④⑤⑥⑦。跋⑧と寄稿文⑨⑩もある。

- 国会図書館伊藤文庫蔵『千虫譜』(No.1, 久志本本), 3冊, 版心に「^{りよい}緑漪軒」とある。中巻に森立之と雪斎の識語(図3), 下巻に伊藤圭介と伊藤篤太郎の識語があり, それによると, この図譜は幕府医官久志本左京常珍, 号緑漪の旧蔵本を伊藤圭介が入手したもの(雪斎の識語は明治5年だから, 圭介が手に入れたのはそれ以前)。転写したのは博物画の名手服部雪斎(転写年代は不明), 題簽の字は森立之。久志本家は代々幕医で栗本家とは同僚だったから, 原本を借りて直接に写した可能性が高い。管見に入った『千虫譜』のうち, 図はもっとも緻密で種の特徴が明らかなものが多く, 原本の面影をよく伝えると思われる。所収点数も, 曲直瀬本について多い。明治15年の錦窠翁臺筵会に, 原本とともに展示された(第2節と注7参照)。
- 国会図書館蔵『栗氏虫譜』(No.2), 3冊, 旧蔵者など不明。No.1には劣るものの, かなり正確な図。図の順序・点数・配置, 巻構成はNo.1と同一。
- 岩瀬文庫蔵『栗氏千虫譜』(No.18), 3冊。文久2年(1862)に山本榕室錫男が久志本左京の所蔵本, つまりNo.1を写したとの奥書があり, 図の出来映えは久志本本に劣らない。図の順序・点数・配置, 巻構成も同一。

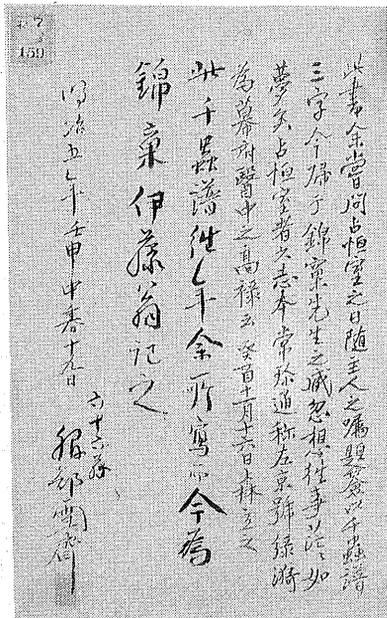


図3 久志本本(No.1)の中巻巻末にある森立之と服部雪斎の識語(ともに自筆)

- 杏雨書屋蔵『栗氏虫譜』(No.22), 6冊。昭和10年に帝国図書館(現国会図書館)蔵本を写したとのメモがある。同館に当時あった久志本系本はNo.2だけだから, それからの転写である。図はあまり良くない。図の順序・点数はNo.2と同じ。巻1・2が他本の上巻, 3・4が中巻, 5・6が下巻に相当。
- 東北大狩野文庫蔵『千虫譜』(No.17), 4冊。明治9年(1876)に伊藤圭介蔵本を写したとの識語があるから, 底本はNo.1。ただし, 他本の上巻にあたる部分が無く, 冊1・2が他本の下巻, 3・4が中巻に相当。それぞれの図の順序はNo.1とほぼ同じである。他本の上巻が欠巻なので序は無いが, 跋⑧と寄稿文⑨⑩は冊4に存在。
- 荒俣宏氏蔵『千虫譜』(No.25), 4冊。未

見なので巻構成や序跋および寄稿文の有無はわからないが、『世界大博物図鑑 虫類』⁽¹³⁾掲載の写真231点はどれも久志本本と図の配置が同じ上に、注記の字配りまで瓜二つなので、No. 1の久志本本を写した可能性が大きい。図は優れている。

5 雪齋本系の写本

下記4点で、内閣本以外は序跋と寄稿文を欠く。

- 東大田中文庫蔵『丹洲虫譜』(No. 13, 雪齋本), 2冊。もと服部雪齋所蔵本で、明治9年(1876)10月に田中芳男が雪齋から譲り受けたもの。もちろん雪齋による写本と思われるが、転写の時期は不明。構成がNo. 1の久志本本とは異なるので、それとは別の機会に写したものである。正確さはNo. 1よりやや劣るものの、良い図である。下巻後半は、本書から東博本を作成した際に増補した部分(次項参照)で、ここだけは彩色されていない。本来3冊だったものを2冊に装訂し直したらしく、冊1が東博本(No. 6)の上巻、冊2が中・下巻に相当。最初から雪齋本にあった図が430点、増補した図が117点、合計547点。これも錦窠翁畫筵会に展示された(第2節と注7参照)
- 東博帝室本『丹洲虫譜』(No. 6), 3冊。各冊の裏表紙見返しにある「明治八年十二月、服部雪齋蔵本ノ内ヨリ写之」との書き入れと、下巻後半に移る個所にある貼紙「従是前紙葉ハ服部雪齋蔵本ヲ写タルモノ、又後葉ハ伊藤圭助⁽¹⁴⁾氏ノ蔵本ヲ写シテ増加ス」から、No. 13を底本として写し、No. 1で増補したとわかる。博物局による転写だろうが、写したのが雪齋自身かどうかは不明。図の配列は底本のNo. 13とほぼ同じだが、増補部分も彩色されている点が異なる。点数が計546でNo. 13より1点だけ少ないのは河童の図が落ちているからである。この愛すべき怪物を、博物局は文明開化の世にふさわしからずと切り捨てたのだろうか。
- 内閣文庫蔵『千虫譜』(No. 9), 3冊。第1冊=序+東博本(No. 6)の上巻前半+下巻前部、第2冊=下巻中央部+中巻全体+下巻後部、第3冊=上巻後半+跋、の構成。それぞれの部分での図の順序は東博本と同じ。河童を欠く点と、No. 1からの増補部(東博本下巻中央部+後半)が彩色されている点から、明治8年以降にNo. 6を再転写したものと考えられる。また、序跋・寄稿文^{⑨⑩}が他本から加えられているが、序の順序^{①②④⑤③⑦⑥}が曲直瀬本と同じだし、同本にのみある嘉永2年の識語(第8節参照)も含むので、曲直瀬本の系統から増補したらしい。
- 東大青洲文庫蔵『丹洲虫譜』(No. 14), 1冊。図は皆無。識語によると、明治16年(1883)に推敲堂学人南石外史が田中芳男蔵本の注記だけを写したのも、つまり底本はNo. 13。

この雪齋本系の図の順序が部分的に久志本本系のそれに似ていると気付いたので、両者を比較したところ、図4の対応が判明した。不思議なことに、東博本での増補にあたっては、久志本本の中巻F部だけ写して、下巻G部は転写していない。そのため雪齋本系の諸本は久志本本系より点数がかなり少ない。

このように図の順序からみると雪齋本と久志本本は共通性はあるが、一方、雪齋本の個々の頁内における図の配置（増補部を除く）は白井本および曲直瀬本と酷似し、久志本本とはかなり異なる。たとえば、『千虫譜』には「ヨロイテウ」（オオムラサキ）が2点含まれるが、久志本本系では雌雄が同一頁の上下に描かれているのに対し、雪齋本系・白井本系・曲直瀬本では、雌は「小蛾二品」とともに、雄は「紅蝙蝠」とともに描かれている（図2）。

6 万香亭本系の写本

次の3点で、いずれも序①～⑦を欠く。絵はあまり正確ではない。それぞれ欠巻・

久志本本 (No.1)		雪齋本系		
		雪齋本	東博本	
上 巻	A	A*	冊 1	上 巻
	B	B**		
	C			
	D	D*		
中 巻	E	H	冊 2	中 巻
	F			
	E			
下 巻	G	F (増補部)		下 巻
	H			

図4 久志本本と雪齋本系写本の比較

久志本本, No. 1, 648点; 雪齋本, No. 13, 547点(増補以前の部分は430点, 増補部(F)は117点); 東博本, No. 6, 546点。*久志本本と対応する部分の一部を欠く。
**久志本本と雪齋本系では図の並べ方がまったく逆。雪齋本系でアルファベットの
ない個所は、久志本本と明確な対応が見られない部分。

久志本本 (No.1)		岩崎 虫多図譜 (No.11)	東博 千虫譜 (No.8)	杏雨 虫類図譜 (No.23)
上 巻	A			
	B			
	C			
	D			
中 巻	E	1後	2中	坤中
	F前	6	2後	坤後
	F後	3	3前	
下 巻	G前			
	G後		3後	
	H前	5		乾前
	H中	4		乾後
	H後	1前	2前	坤前

図5 久志本本と万香亭系本の比較

「A・B・C……」は図4のそれと対応している。「前・中・後」は前部/前半・中部・後部/後半, 数字および「乾・坤」は巻表示。空白部は欠けている部分。

錯巻があると思われるし、細部にはかなりの相違も見られる。それで当初は相互の関連に気付かなかったが、いろいろ比較するうちに、おおよそ図5の対応があり、この3点は同一の系統とわかった。共通して久志本本の上巻部分と下巻冒頭部を欠くのは、偶然に3点ともその部分が失われたのではなく、最初から無かったのではないか。

- 東洋文庫岩崎文庫蔵『虫多図譜』(No. 11, 万香亭本), 5冊。ただし, 巻1, 3~6で, 巻2が欠。「万香文庫」印があるので, 前田利保万香亭旧蔵。巻6巻末に寄稿文⑨⑩と跋⑧がある。
- 東博徳川本『千虫譜』(No. 8), 3巻。ただし, 現存の巻1は『和漢三才図会』「虫部」の写しで, 巻2・3だけが『千虫譜』の転写。巻3巻末に跋⑧があるが, 寄稿文⑨⑩はない。図5の対比から, 本来はNo. 23の乾巻に相当するものが巻1だったと思われる。
- 杏雨書屋蔵『虫類図譜』(No. 23), 2冊。序跋も寄稿文もない。「岸藩文庫」印があるので, 岸和田藩旧蔵。服部雪斎は同藩の出身といわれる¹⁴⁾が, 絵の出来具合からみて, 雪斎が写したとは思えない。図5における比較から, 本来はNo. 8の巻3に相当する部分が存在したように考えられる。

7 白井本系の写本

下記5点。序跋と寄稿文⑨⑩を有し, 序の順序は①②④③⑤⑥⑦(No. 15は跋⑧と寄稿文⑨⑩を欠く)。巻構成がそれぞれ違い, 巻表示の乱れもあるが, 図6のように対応する。もっとも, 細部については図の順序がかなり異なる箇所もあり(とくにNo. 15とNo. 16), 脱落している部分もあるため, 所収点数にかなりの差がある。図は正確と

は言いがたい。また, いずれも本文の最初に「丹洲栗本昌臧」と著者名が記されているのが他系統写本に無い特徴。久志本本と部分的に図の並び方が似ているが, 全体としては図4・5のような整然とした対応が見られない。

白井本 栗氏虫譜 (No.3)	東大農 千虫譜 (No.15)	杏雨 千虫譜 (No.21)	東大農 千虫譜 (No.16)	伊藤文庫 千虫譜 (No.4)
上 巻	も と 上 巻	1	1	1
		2	4	3後 3前
下 巻	も と 下 巻	3	2	2
			3	
		4	5	欠
		5	6	4
7	5			

図6 白井本系写本の比較

数字は巻表示, 「前・後」は前半・後半, 「欠」は欠けている部分。

●国会図書館白井文庫蔵『栗氏虫譜』(No. 3, 白井本), 2冊。松田直人寒翠が明治24年(1891)に写したとの識語がある。この写本の図はかなり悪く, ナミアゲハの羽の裏面を, 誤ってキアゲハの表に仕立てているなどの間違いもある(この間違いはこの本のみ)。

●国会図書館伊藤文庫蔵『千虫譜』(No. 4), 5冊。1冊欠巻があるらしく, また巻の順序が乱れているが, それぞれの対応部

分での図の順序・点数・配置は白井本と瓜二つである。

- 東大農学部図書館蔵『千虫譜』(No. 15), 1冊。本邦近代昆虫学の草分け、佐々木忠次郎旧蔵。江崎悌三^四が農学部本を紹介しており、所収写真からそれが本写本とわかる。江崎によると、もとは『栗氏虫譜』と題する2冊本で、上下巻の分け方は白井本と一致していた。
- 東大農学部図書館蔵『千虫譜』(No. 16), 7冊。明治22年(1889)移管の印があるので、東京農林学校時代の末期(23年に帝国大学農科大学となる)に農商務省から移管されたもの。序のうち①②④⑤⑥の執筆者の印が朱で模写されているのは他本には見られない特色で、原本からの直接転写を思わせる。ただし、絵はあまり正確とはいえない。また、巻の順序に乱れがある(図6)。
- 杏雨書屋蔵『千虫譜』(No. 21), 5冊。用紙の版心に「晩翠軒」とあり、「陸前奈良坂源一郎」印がある。仙台出身で明治後期に東京帝大を卒業した医師、愛知医学校教授奈良坂源一郎か(仙台人名大辞典)。晩翠軒については不明。

8 曲直瀬本

国会図書館蔵『栗氏千虫譜』(No. 5), 10冊, 曲直瀬愛旧蔵。類本は無いが、分類的配置になっているのはこの写本だけなので、独立して扱う。本書は恒和出版から昭和57年(1982)にモノクロ版影印本(解説, 小西正泰)が『千虫譜』の題名で出版されている。

巻10巻末に「大膳^{だいぜん}亮好庵氏所蔵ノ写生図ヲ購得シ、栗本鋤雲氏蔵本ノ原稿ヲ借覧シ、三橋生ヲシテ其不足ヲ補写セシメ、自ラ一校了。明治十二年十月十一日 曲直瀬愛識」と記した識語がある。大膳亮好庵はもと幕医^四。上の識語にあるように曲直瀬は六代瑞見栗本鋤雲の蔵本、つまり原本から補写させている。ただし、補写し忘れた箇所もあり、指示を記した貼紙がいまも残る。曲直瀬愛の父、曲直瀬養安院が栗本鋤雲の本草学の師だったので、原本を借りられたのだろう。

以下、巻ごとに内容の概要を記すが、不完全ながらグループごとに分けられていることがわかるだろう。なお、図は正確とはいえないものも少なくない。

巻1: 序文は①②④⑤③⑦⑥の順。ついで「栗氏千虫譜上巻目録」と右肩に記した1丁があるが、実際には目録欄は空白(影印本はこの1丁を欠く)。続く本文は有用昆虫4品だけ。

巻2: チョウ・ガの幼虫, ホタル, 水生昆虫, カミキリムシ。

巻3: カ, ハチ(アブを含む), カメムシ, セミ, 冬虫夏草(セミタケ), トンボ。

巻4: 甲虫(カブトムシなど), 水生昆虫, ハゴロモ・ヨコバイなど。[本巻はかなり雑多]

巻5: 甲虫(ハンミョウなど), ハエ, ゴキブリ, ダニ, シラミ, クツワムシ・キリギリス・コオロギ・バッタ類。

巻6: スズムシ・マツムシ, 寄稿文⑨⑩, クモ, ゲジゲジ・ムカデ, サソリなど。

巻7：カエル，河童，イモリ，トカゲ，冬虫夏草。

巻8：タツノオトシゴ，サンショウウオ，イモリ，トカゲ，フナムシ，ナメクジ・カタツムリ，ヒル，コウモリ，ナマコ，アメフラシ。

巻9：ヒトデ，ウニ，貝類，クラゲ。

巻10：カニ，エビ，タコ。巻末に跋文⑧，ついで「嘉永二年己酉夏日樟宇安一并書」と記した識語（この人物は特定できなかった。また，転写の経緯などは記されていない）と，前述の曲直瀬の識語がある。

『千虫譜』の原本2組のうち，「順序ヲ整頓シ品数ヲ増補」した方は，明治15年以前に火災で失われたとの証言があったことを第2節で述べた。この曲直瀬本は，確かに一応分類的に整理されているし，本写本だけにあつて他本に無い図が25点ある。曲直瀬本は，この2つの特徴からみて，その増補本（原本B）の写本である可能性が大きい。もっとも，曲直瀬本に無く他本に存在する図が14点ある（No.1の久志本本はそのすべてを含む）ので，全体として点数に大きな差はない。

ただ，謎が一つ残る。曲直瀬愛は明治15年の錦窠翁筆筵会に出品された原本Aの解説（第2節）で「順序ヲ整頓シ品数ヲ増補」した原本がかつて存在したことに触れながら，自分自身がそれ以前に入手していた本写本にはまったく言及せず，もちろん出品もしていないのである。栗本家蔵の原本を栗本鋤雲ではなしに曲直瀬が解説したのも不思議である。

9 その他の写本

調査した25点のうち，上記の5系統に属さないものは以下の6点である。いずれも抄写で，序文・跋文・寄稿文に触れないものはそれぞれを欠き，No.24以外は旧蔵者も不明。

- 東博徳川本『栗氏虫譜』（No.7），本来は6冊だが，冊6はいま行方不明。残る5冊はいずれも画紙を横長に綴じている。用紙の大きさと紙質，絵の描き方および内容からみて，この5冊は冊1～3／冊4／冊5の3種類に区別でき，本来は由来の異なる3件を一つにまとめた可能性もある。冊1は海産無脊椎動物，冊2は昆虫，冊3は海産無脊椎動物と昆虫で，合計して『千虫譜』の図44点と出典不明の図14点から成るが，図はあまり上手ではない。冊4は大半が昆虫で，111点すべてが『千虫譜』の非常に正確な図。少なくともこの冊4は，図の配置と図の順序から，久志本本系のように思える。冊5は蟹類29点と亀1点。いずれも『博物館虫譜』中の丹洲自筆画の正確な写しで，『千虫譜』にもある図は3点だけ。
- 内閣文庫蔵『昆虫魚介図』（No.10），1帖。243点全部が『千虫譜』で，図は正確。題に「魚介」とあるが，魚類は1点もない。すでに内閣文庫の展示会目録『古書に見る植物・動物たちの江戸時代』（1986）で，「『千虫譜』などの図譜を模写して作成されたものと推測される」と指摘されていたが，今回の調査で『千虫譜』だけからの抄写と判明した。

- 岩崎文庫蔵『虫譜精図』(No. 12), 1冊。全113点のうち3点を除き『千虫譜』の抄写。図はうまくない。新たに判明した『千虫譜』の一つ。
- 岩瀬文庫蔵『栗本氏虫譜・屋代太郎松鈴虫考』(No. 19), 1冊。『千虫譜』の注記138項の写しで、図は墨絵の雑で小さい略画だけである。末尾に寄稿文⑨の全文が写されているが、寄稿文⑩「松虫鈴虫の名の弁」はない。抄出した注記の配列(寄稿文を除く)がNo. 24と一致し、図の巧拙からNo. 24の転写本と思われる。
- 岩瀬文庫蔵『虫譜』(No. 20), 2冊。『千虫譜』の図293点と出所不明の図13点。注記はほとんど写されており、名称も欠くものが多い。また、『千虫譜』にある名称を用いず、まったく別の名を記す場合もある。イモムシや蟹の図はかなり上手だが、甲虫やセミ・トンボは下手。これも新顔の『千虫譜』。
- 神習文庫蔵『栗氏虫譜』(No. 24), 1冊。『千虫譜』の注記143項の写し。図はかなり巧みに墨で描かれた小さな略図があるだけで、それも原画数匹のうち1匹、あるいは表裏のうち表側だけとか、心覚え的なもの。序①⑥だけがあるが、そこに丹洲の印4点が墨で模写されている。跋と寄稿文は無い。国学者井上頼圀(1839~1914)旧蔵。先に述べたが、No. 19はこのNo. 24を写した可能性が高い。

10 まとめ

『千虫譜』写本についての今回の検討結果をまとめると、次の8項になる。

- (1) 今回の調査の対象とした25点はすべて写本で、自筆原本は発見できなかった。もと2組あった原本はともに失われたとの証言(第2節)が、残念ながら正しいのだろうか。
- (2) 写本には、久志本本系・雪斎本系・万香亭本系・白井本系・曲直瀬本の5系統がある。このうち、雪斎本系と万香亭本系には大幅に欠落している部分がある。
- (3) 図の配列順序からみて、久志本本系・雪斎本系・万香亭本系の三者は密接な関係がある。
- (4) 個々の面内での図の配置からみると、雪斎本系・白井本系・曲直瀬本は似ている個所が多く、久志本本系とは異なる。
- (5) 図の点数は曲直瀬本657, 久志本本系645, 白井本系575~626, 雪斎本系539~547(いずれも欠巻のないもの)。第8節で述べたが、曲直瀬本だけにある図と曲直瀬本には無い図があり、それをともに勘定に入れば、『千虫譜』に登場する図は計670点ほどである。
- (6) 分類の整理が行われているのは、曲直瀬本ただ1本である。
- (7) 図がもっとも正確と考えられるのは久志本本系で、雪斎本系がこれに継ぐ。これに対し、白井本系と曲直瀬本は、あまり正確ではない。
- (8) 久志本本系・雪斎本系・白井本系・曲直瀬本には、天保4年(1833)の年記をもつ蛾の図(ジコウボウ)が存在する。万香亭本系を含めてジコウボウ前後の個所が脱落している写本も、文政11~13年(1828~30)の年記をもつ図がある。したがっ

て、今回調査した写本には、丹洲が序を記した文化8年(1811)直後の姿を伝えるものは無く、すべて文政末年か天保初年以降、おそらくは天保5年に丹洲が没した後の転写と断定できる。[追記(2)参照]

第2節で述べたように、栗本家には順序を整頓していない原本Aと「順序ヲ整頓シ品数ヲ増補」した原本Bがあった。そうすると、上記5系統の写本のうちで唯一分類的に整理されている曲直瀬本が原本B、残りが原本Aの系列に当たることになるが、後者が4系統も存在するのは何故か。栗本家で原本自体を何回か編集し直した、転写者がそれぞれ独自に配列を変えた、転写を重ねるあいだに順序が乱れた等々の可能性が考えられるが、それについての判断材料はいま無い。

さて、動物学史的見地からの検討にあたっては、言うまでもなく、原本に近い姿の写本が望まれる。それには、①所収点数(欠落が少ないもの)、②注記の内容(省略や後人の追加が無いこと)、③図の動物学的正確さ(第2節で記したとおり、原本Aの図がきわめて正確だったとの三宅の証言がある)が問題となる。

まず所収点数だが、抄写本はもとより、欠落部の多い雪齋本系と万香亭本系、あるいはそれ以外でも欠巻のある本は落第である。すると残るのはNo.1~3, 5, 15, 16, 18, 21, 22のわずか9点。注記に関しては、この9点は大同小異で合格といえる。そこで図の正確さだが、上記(7)に記したように、久志本本系は概して優れており、白井本系と曲直瀬本は劣る。前記9点のうち久志本本系はNo.1, No.2, No.18の3点だが、もっとも優れているのは、原本から直接写した可能性が高いNo.1の国会図書館蔵久志本左京旧蔵本であり、それに次ぐのはNo.1を転写したNo.18の岩瀬文庫蔵山本榕室旧蔵本で、No.2の国会図書館所蔵本はやや劣る。

以上の理由から私は、No.1の久志本左京旧蔵本またはNo.18の山本榕室旧蔵本を、原本に近い写本として今後の研究材料とするのが妥当と考える⁽⁹⁾。ただ、No.5の曲直瀬本は、図は劣るが、原本Bの唯一の写本として検討さるべき独自の存在である。

『千虫譜』の原本は失われたようだが、『千虫譜』中の図と同一の自筆画がいくつか残されている。これまでに気付いたものは、東博蔵『博物館虫譜 亀・蜥蜴・蛇・蝦蟇類』中の2点、同『博物館虫譜 甲殻類』中の8点、同『博物館介譜 柔軟類・多肢類』の12点、国会図書館蔵『写生物類品図』(特1—3279)の2点、同『異魚図纂・勢海百鱗』の1点、合計25点である⁽⁹⁾。しかも注記は『千虫譜』より詳しい例が多く、そのような場合は残存自筆画が原図で、『千虫譜』の図はそれをもとに描かれたものではないかと考えている。したがって、その調査は得るところが大きいだろう。

続報では、久志本本および残存原図を対象として、動物学史的な見地からの検討を行ないたいと考えている。

注 記

(1) 栗本丹洲(1982),『千虫譜』(解説,小西正泰),恒和出版。

(2) 磯野直秀(1992),東京国立博物館蔵『博物館図譜』について,慶應義塾大学日吉

紀要・自然科学, 12号, 73-87。磯野直秀(1993), 日本博物学史覚え書(I), 同前, 14号, 96-109。磯野直秀(1994), 『衆鱗図』と栗本丹洲の魚介図, 同前, 15号, 39-66。

- (3) 引用文では漢字と仮名に現行字体を用い, 濁点と句読点を適宜加えた。引用文中の()は原注, []は磯野による注と補足である。点数: 同一図内に同一種が複数描かれているときは併せて1点としたが, 諸写本の比較の関係上, 雌雄などを別々に数えた場合もある。また, 同一の種類でも, 別図として描かれていればそれぞれ1点とした。ただし, 判断に迷う場合もあるので, 点数はあくまで目安にすぎない。
- (4) 丹洲の経歴と著作については次の文献を参考にした: 『新訂寛政重修諸家譜』巻1292(続群書類従完成会), 『徳川実紀』(吉川弘文館), 『文化武鑑』(柏書房), 『文政武鑑』(柏書房)。藤浪剛一(1935), 栗本瑞仙院の事跡とその墓所, 中外医事新報, 1225号, 425-432。福島好和(1978), 栗本丹洲と魚譜(1), 人文論究, 28巻3号, 1-23。小西正泰(1982), 栗本丹洲著『千虫譜』解説(→注1)。上野益三(1987), 『日本動物学史』, 362-370, 八坂書房。
- (5) →注2。
- (6) 江戸時代の博物図譜(筆写本)では, 序文を記した後でも次々と図を描き足していくのが普通である(たとえば毛利梅園や松森胤保の諸図譜; 磯野直秀, 『梅園画譜』とその周辺, 参考書誌研究, 41号, 1-19, 1992年。磯野直秀『両羽博物図譜』の研究, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 5号, 27-47, 1989年; 6号, 82-98, 1989年)。したがって, 序を記した年をもって成立年とするのは誤解を招く。序文を記すのは, それまで個々に描いてあった図を整理して一個所にまとめた時くらいに受け取る方がよく, 年表などでは「……年成」ではなく, 「……年序」と記載するのが望ましいと思う。
- (7) 『錦窠翁叢筵誌』, 巻3, 122, 1890年。同時に展示された写本2点の解説は, 「千虫譜 文化八年, 栗本瑞見翁著。博物ノ諸書草木鳥獸ノ編アリト雖モ, 世ニ虫類ヲ彙ムルノ寥寥観ルコト無ヲ以テ, 之ヲ稿スト云ヘリ」(伊藤圭介出品, 表3のNo. 1), 「丹洲虫譜 栗本丹洲著。水陸ノ虫蛇二百余种ヲ図譜トナシ, 魚介ノ類モ交レリ。蓋シ文政末天保初年ニ成ル者」(田中芳男出品, 表3のNo. 13)。なお, 『温知社薬物会品目』(1882)には, 丹洲の孫, 大淵祐玄による「ツブクロ」(モリアオガエル類の卵塊か)の図の解説として, 「ツブクロ……祖考丹洲栗本先生著増補千虫譜ニ載タリ……惜クハ原本鳥有二係ル……」とあり, 『叢筵誌』の曲直瀬の言を裏付ける。
- (8) 三宅恒方(1912), 栗本瑞見翁の千虫譜に就て, 昆虫世界, 16巻, 28-30。三宅恒方(1919), 『昆虫学汎論』, 下巻, 658-659, 裳華房。
- (9) 江崎悌三(1952), 日本昆虫学史話(4), 新昆虫, 5巻11号, 21-29 [『江崎悌三著作集 2』(思索社, 1984年)に再録]
- (10) 荒俣 宏(1991), 『世界大博物図鑑 虫類』, 平凡社。
- (11) 栗本丹洲の筆跡については, 注(2)の磯野(1992)を参照。
- (12) 『文化武鑑』(柏書房)などによる。

- (13) →注10.
- (14) 福井久蔵 (1937), 『諸大名の学術と文芸の研究』, 上巻, 392, 厚生閣 [復刻版, 原書房, 1976年]。ただし, 川瀬一馬は福山藩という (『森立之・約之父子』, 『日本書誌学之研究』, 1943年)。
- (15) →注9。
- (16) 『江戸幕臣人名事典』, 3巻, 9, 新人物往来社, 1990年。
- (17) ただ, 一つ気になることがある。注7で記したように, 『温知社薬物会品目』中の大淵祐玄の解説には, 「増補原本にはツユブクロの図があった」旨の記載があるが, 現存の曲直瀬本にはこの図が見当たらないのである。
- (18) 三宅恒方の残した原本Aの写真(図1)では「梧桐皮上にある蠅」(ミツマタハマダラミバエ)の次に「鬼蚊」(ベッコウガガンボ)が描かれているが, 久志本本はその順になっている。一方, 雪斎本系・白井本系・曲直瀬本では, 「鬼蚊」と「コガネ虫」の2点を上下に描いた頁の後に「梧桐皮上にある蠅」の頁が来る。この異同は, 久志本本が三宅の見た原本Aに近いことを示しているように思う。
- (19) →注2, 磯野 (1992, 1993)。ほかに, 国立科学博物館蔵の丹洲自筆『龍絵巻物』1巻にも『千虫譜』の原図らしいトカゲ類などの図がかなり含まれているが, いま修理中のため後日詳しく調べたい。

[謝辞] 国立国会図書館古典籍課の馬場萬夫課長をはじめ, 同課の方々のご理解とご協力がなければ本研究を進められなかった。また, 写真撮影を許可された東京国立博物館をはじめとして, 『千虫譜』を所蔵する各図書館から各種の便宜を受けた。田中誠氏にはいろいろとご教示をいただき, 国会図書館専門資料部の高山直也氏と尾形香代子氏には本誌への掲載と写真撮影でお世話になった。この場を借りて, 各位に厚く御礼を申し上げたい。

(いその・なおひで 慶應義塾大学経済学部教授)

[追記(1)] 栗本丹洲が法印に叙せられたのは文政4年とも10年とも従来いわれてきたが, じつはいずれも誤りで天保元年(1830)1月16日であることが『徳川実紀』と『武鑑』から明らかになった。詳しくは, 「日本博物学史覚え書(II)」(慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 16号, 印刷中)を参照されたい。

[追記(2)] 中村禎里(1993)は最近の報文「『水虎考略』略考(2)」(立正大学教養部紀要, 27号, 217-237)において, 注記に記載されている年記から, 無窮会神習文庫蔵『栗氏虫譜』(表3-No.24)は文化8年(1811)段階の成立, つまり『千虫譜』のもっとも初期の写本であろうと述べている。同本は抄写本と思われるので他本との比較が難しいが, 中村説の当否は改めて検討してみたい。